

担え銃 (1918)

SHOULDER ARMS

メディア	映画
ジャンル	コメディ
製作国	アメリカ
色彩	B&W
時間	44分
初公開日	1919/07
公開情報	劇場公開
リバイバル	1975/07 [東宝東和]

【解説】

第一次大戦最後の年にチャップリンが放った傑作戦争諷刺コメディ。冒頭は新兵訓練を受ける我らがチャーリーのヘマぶりが繰り広げられる。これはもう身体を使ったストレートな笑い。そして前線へ。完全武装したチャーリーの出で立ち、フライパンにおろし金、泡立器、剃刀、風呂桶まで身につけて、怒った軍曹が身体検査をするとまだ出てくる、ねずみ取りなんてものまで。その後、地下壕に入って身動きの効かない所を、おろし金に背中を擦りつけて搔くのがおかしい。雨の中で歩哨に立つと思い出されるのは故郷ブロードウェイの賑わい。が、彼には国から一通の便りもなく、ようやく届いた小包の中には腐ったチーズ。そこで、防毒マスクをつけ手榴弾よろしくそいつを敵陣に投げ込むと、見事、将校の顔に命中。夜半まで降り続く雨が壕内にもたらず洪水でのお笑いがひとしきりあってのち、あわれフランス、と独軍の爆撃の惨禍の中逃げ惑う少女が映し出される。一方、チャーリーたちは暢気に食事。煙草の火なんざ飛んでくる敵の弾につけてもらう。これも古典となったギャグだ。で、ひよんなことで決死隊の一員となったチャーリー。敵陣をなんと木に変装して“だるまさんが転んだ”よろしく動きまわるゲリラ作戦。まさに抱腹絶倒のマイムが見られる本編の白眉。捕われた軍曹を救って一人逃れた崩壊寸前の民家で休もうとすると、先ほどの少女が現われる。そこへ敵兵も。万事休すかと思えば、家が崩れて助かった。が、少女は連行される。追って忍び込んだ敵の宿舎。将校の毒牙にかかりかけた少女を救うと、皇帝と皇太子の登場である。そこでチャーリーは将校に化け、皇帝御用車に乗り込んで、そのまま自陣に向かってひた走るのであった……。オチも小気味よく決まって、戦争の虚しさを訴えるテーマが嫌味なく伝わってくる所、さすがである。

【クレジット】

監督	チャールズ・チャップリン	Charles Chaplin
出演	チャールズ・チャップリン	Charles Chaplin
	シド・チャップリン	Syd Chaplin
	エドナ・パーヴィアンス	Edna Purviance